

学校コンサルテーションにおけるコンサルティーマン・コンサルタンの連携に関する研究(2)

ーコンサルタントとしてのスクールカウンセラー・相談員の自己評価ー

小林朋子*

A Study on Collaboration between Consultants and Consultees in School Based Consultation(2)

Tomoko KOBAYASHI

Abstract

The objective of this study was to examine the thoughts of consultant and to evaluate their consultation by consultants. We administered questionnaires to a total of 304 school counselor regarding their thought as consultant and asked them to evaluate their consultation process. As a result, the thoughts of consultants were classified into 10 categories. The study also indicated that some consultants became aware of communication with consultees through consultation, did not work best by limit of time. Moreover, consultant and consultee had common thought that there were many differences between the abilities and level of enthusiasm of each consultant.

キーワード: コンサルテーション コンサルタント

I. 問題と目的

コンサルテーションは、「異なった専門性や役割を持つ者同士が子どもの問題状況について検討し、今後の援助のあり方について話し合うプロセス(作戦会議)」(石隈, 1999)と定義されている。このコンサルテーションでは、コンサルティーマンとコンサルタンは異なる領域の専門家同士であり、通常コンサルタントが心理の専門家であるスクールカウンセラー(以下、SCと略す)、コンサルティーマンが教師であることが多い。

Medwey & Forman(1980)、伊藤・中村(1998)の研究などから、コンサルタントとコンサルティーマンの間には立場の違いを反映した差異があったことが明らかになっている。小林(2008a)は、コンサルティーマンである教師を対象とした調査を行い、コンサルテーションに関するSC・相談員に対する意見や評価に関する自由記述を分析した。その結果、コンサルテーションを通して安心感や有効感といった肯定的な評価をした教師がいた一方で、学校の特性や忙しさをSC・相談員が考慮しないかわり、コンサルタントの力量や熱意がばらばらについていること、そしてSC・相談員に相談しても問題が解決しないことなどの否定的な評価もみられた。また、人物や専門性、問題解決への力量、教師の忙しさへの理解と配慮といったコンサルタントへの要望な

どがあげられたことを示している。

そこで、コンサルテーションを提供する側である「コンサルタント」に焦点をあてる。本研究ではコンサルタントであるSC・相談員に対して、学校コンサルテーションに関して自由に意見を求め、その記述からコンサルタントのコンサルテーションに対する意見や評価を明らかにし、小林(2008a)で明らかにしたコンサルティーマンの評価・意見と比較し、学校コンサルテーションの在り方について考察したいと考えた。

II. 方法

1. 調査対象者

静岡県、広島県、新潟県、大阪府、三重県、千葉県、北海道、東京都、神奈川県、茨城県、栃木県内の学校と相談機関に勤務するコンサルタント(SCと相談員など)にアンケート調査を実施し、304名から回答を得られた(回収率77%)。欠損回答が3個以下の回答のみを使用することにしたため295名となった(有効回答率97%)。

2. 調査内容

調査用紙の内容は、表紙にコンサルテーションに関する簡単な説明文を入れ、コンサルテーション、コンサルタントとコンサルティーマンの用語の意味について説明した。そして、「教師と異なる専門家によるコンサルテーションについてご意見などがありましたら自由にお書き下さい」と教示し、自由に記述してもらった。

* 静岡大学教育学部

3. 調査時期

2006年11月上旬～2007年1月下旬に実施した。

4. 実施の手続き

県と市教育委員会に依頼をし、協力が得られた委員会が管轄している学校に勤務するSCと相談員に対して勤務校に調査用紙と返信用封筒を送り郵送にて回答を求める方法と、筆者が担当した研修会などに参加した相談員にその場で協力を求め、直接配布と回収を行う、2つの方法にて実施した。

なお、相談業務への支障を考慮し、事前に教育委員会もしくは管理職に内容の検討を依頼した。また日本発達心理学会(2000)の倫理規定に基づき、プライバシーの保護を保障するため調査用紙のフェイスシートに個人データの外部流出に最新の注意を払うことや、データ解析が終わったらシュレッダー処理する旨を回答者に伝えた。

5. 分析方法

自由記述を回答者ごとに、学校心理学の専門家1名により分類した。次にデータをランダムに抽出したものを、独立した他の評定者1名に分類してもらい一致率を算出した(一致率は87%)。なお、分類の不一致は、協議の上で調整を図った。

Ⅲ. 結果

1. 回答者の概要

回答者の概要としては、性別では男性は24.4%(72名)、女性は72.9%(215名)であった。年代は、20代14.6%(43名)、30代28.5%(84名)、40代21.0%(62名)、50代19.0%(56名)、60代以上14.6%(43名)、不明が2.4%(7名)であった。コンサルタントの立場は、SCや相談員として校内に配置されていた人が4.4%(13名)、中学校に配置は78.3%(231名)、校外の相談員は7.8%(23名)、高校に配置は0.3%(1名)、不明が9.2%(27名)であった。学校での臨床経験年数は、1年未満が12.9%(38名)、1-3年未満が20.7%(61名)、3-5年未満が23.7%(70名)、5-7年未満が16.3%(48名)、7-9年未満が11.2%(33名)、10年以上が13.2%(39名)、不明が2.0%(6名)であった。さらに現在の勤務場所での勤務年数について尋ねたところ、1年未満が30.2%(89名)、1-3年未満が34.9%(103名)、3-5年未満が17.6%(52名)、5-7年未満が9.8%(29名)、7-9年未満が4.1%(12名)、10年以上が1.4%(4名)、不明が2.0%(6名)であった。

2. 分類カテゴリー

各記述の内容を、田村・石隈(2007)や上村・石隈(2007)の研究を参考にし、次の2つのSTEPで分類していった。

STEP1では、<コンサルテーションに関する難しさ>、<コンサルテーションの重要性と目的>、<コンサルタントとしての意識・態度>、<コンサルティへの

の関わり>、<自己評価>、そして<コンサルテーションの課題>にカテゴリーを作成した。

STEP2では、<コンサルテーションの難しさ>に関して、SC・相談員の勤務状況に関連する難しさと、学校や教師への支援の難しさ、さらにSC・相談員の仕事そのものの難しさや大変さに分類されると判断されたことから、<時間が制限されていることの難しさ> <学校・教師への支援の難しさ>、そして<SC・相談員の大変さ>としてさらにカテゴリーを細分化させた。次に<コンサルティへの関わり>では、小林(2008b)が示したコンサルテーションのSTEPである「情報収集・アセスメント段階」と「問題解決段階」にあてはめて分類できた。そこで、教師とのコミュニケーションに関する記述が含まれる<コンサルティとの関係づくり>、そして教師が抱える問題を解決するための支援に関する具体的な方法については<コンサルティの問題解決への支援>とした。最後に、<コンサルテーションの課題>について、コンサルテーションそのものの概念について学校現場での理解が不十分であることを述べた<コンサルテーションについての理解のなさ>、そしてコンサルタント自身の課題について触れている<コンサルタントの課題>としてさらに分類した。コンサルテーションの重要性についての考えなどについて述べている<コンサルテーションの重要性と目的>、専門性をもったコンサルタントとしての意識や態度について「こうあるべき」という考えなどが含まれる<コンサルタントとしての意識・態度>、自らのコンサルテーションに関する評価や感想といった<コンサルテーションに関する自己評価>はこれ以上分類することはできないと判断し、STEP1のままとなった。この結果、最終的に分類された10のカテゴリーとその記述をTable1に示す。

Ⅳ. 考察

1. コンサルタントが捉えた<コンサルテーション>

カテゴリーの中で最も多かった記述は<コンサルテーションの重要性と目的>であった。コンサルタントにとって、コンサルテーションが学校での相談活動において重要なウエイトを占めているという認識であったことが確認された。しかし、その一方で、コンサルテーションを進めていく上での難しさがあげられていた。コンサルタントが指摘した難しさとして、多くあげられていたのが<学校や教師へのコンサルテーション>であった。このカテゴリーの記述を見ると、コンサルタントに対しての「抵抗」がみられる教師、一方で子どもをコンサルタントに任せっきりにしてしまう教師の態度といったコンサルティの様々な態度に対して、コンサルタントがその対応に困惑したことがわかる。コンサルティの抵抗や依存といった問題は、すでにErchul & Martins(2002)がコンサルティ

<時間が制限されていることの難しさ>(7件)

- ・コンサルティング、調整連携は大切だと思うのですが、勤務時間が少なく、SCの居住地と学校との距離が遠すぎなど、深く関わりにくいことが多いという実感があります。
- ・コンサルティング→危機介入的が多い。週1のSCの勤務体系は不利。結局無給で対応することとなるが、それでは専門家としての地位を保証しているものではないと思う。
- ・多忙な担任とのコンサルティングの時間がとれないのに苦戦している。
- ・コミュニケーションがとても大切だと思うのですが、それぞれの業務に追われて理解を深める時間が持てません。
- ・多忙な教師と子どものことで十分時間をかけて話ができないことに不満があります。
- ・プロ同士で検討や討議のできる時間が十分ないのが課題である。
- ・年々コンサルティングが必要なケース、先生方からのニーズが増えているが、常勤でないため時間が取れない。

<学校・教師への支援の難しさ>(8件)

- ・現場の先生方には、指導的・指示的な立場に留まっている方がいます。視点の違い、ギャップを感じる。
- ・コンサルティングを開いて取り入れようとする教師もいれば、まったく取り入れようとしない教師がいるのも現実だと思う。どこに視点を置いて子どもの行動を理解しようとするのか、広く多くの教師たちに働きかけをしていければいいと思います。
- ・教師が子どもの正しい理解と理解のうえに立った対応がまだ足りないように思う。教科指導が優先されている。
- ・学校側が専門家に生徒たちの心の問題を全て任せようとする傾向があります。学校側がSCの専門性をどのように活かしたいかを明確にできれば、良い協働関係を結べると考えます。
- ・学校の管理職によってカウンセラーの使われ方はまったく違う。校長に「相談」という言葉が生徒と接する中においては抜けているものも多い。
- ・学校は多忙なためか、専門家によるコンサルティングの機会・場を活用しないように思われる。学校教育の中にコンサルティングを活かしていくという考えや方策が育っていないように思われる。
- ・校内委員会等で意見交換する際、教師から明確な指示や即効性のある対応の仕方の提示を期待されることが多くあり、戸惑います。受動的にアドバイスを受けるのではなく「ここは検討しあう場」という共通認識を構築することが大事だと思います。
- ・カウンセリング事業そのものを教師が受け入れているか否かによって、コンサルティングの可能性も複雑である。
- ・管理職次第。SCをどのように活用していくかをその方がどのように考えて、どう位置づけられるかということによってずいぶん変わってくると思います。

<SC・相談員の大変さ>(2件)

- ・SC一人一人の得意分野があるのにオールマイティを求められるのは自分の力の伸びにもなるが、正直しんどいと思う。
- ・教育相談員となって1年目です。校内の相談室のあり方は各学校によって異なっています。相談員としての勤めを自分の中で決めるまで悩みました。ただ思うことは、相談員の仕事のために生徒がいるわけではないということです。

<コンサルティングの重要性和目的>(11件)

- ・教師が情熱的になり、知らず知らずの内に生徒や保護者関係を傷つけていることが多い。異なる立場や視点のコンサルティングは非常に重要であると思う。
- ・立場の違いを超えて必要なことに関する必要なことに関する情報を共有できること、問題解決に際して各々が各々の立場の特色を生かした具体策を分かち合えること。
- ・現在、週1日のみ勤務形態では、SCのしごとの大部分は教員へのコンサルティングであると思い活動しています。同一校での勤務年数が長くなるとその活動も定着してくるようです。
- ・子どもを支援するということは、そこに教える教師を支援することに尽きると思います。

- ・学校教育を地域（医療、福祉、専門教育機関など）がサポートしていくことはこれからますます必要になってきます。コンサルテーションはそのような関係作りの役割を担っていると思います。
- ・コンサルテーション側と学校側の意見が一致したとき、有効な援助ができると思います。そのためには互いが子どもを中心に柔軟な考え方ができることがとても大切と考えています。
- ・学校の中で教師と異なる視点（指導ではなくいったん受け取る）を持った人間がいることも大切だと思います。
- ・現在の日本における教師に対しての（あるいは学校に対しての）要望はますます高くなるばかりである。こうしたものをうまく整理し、本来教師が力を入れなければいけないことと、そうでないことを分けて対応していくためにも、心理以外の、例えば法律や福祉などの専門家のコンサルテーションがもっと必要になってくるであろう。もちろん専門である教育分野についてもである。
- ・コンサルテーションをいかに充実させるかということが、SC が動きやすくなるかどうか、役に立つかに繋がるものだと思う。
- ・（コンサルテーションは）大事だと思う。先生たちも目からうろこみたいで、しかもすぐに賛同して、それは大事だと熱心に取り組んでいます。
- ・コンサルテーションの最終的な目標はコンサルタントが介在しない学校自身による自立的な問題解決の力をつけることだと思います。

<コンサルタントとしての意識・態度>(9件)

- ・多忙な教師と異なり、当該生徒と落ち着いた雰囲気の中でゆっくりと面接し、気づき変容していく態度を見守りながら教師を支援したい。
- ・学校によってコンサルテーションの深さはいろいろだと思いますが、SC の役割は学校の一部と思って活動しています。
- ・お互いの専門性を認め合う謙虚な態度
- ・一人ひとりに対する尊敬の念を忘れない
- ・学校が SC に何を求めているのか何が協働できるのかというニーズをしっかりと把握して動くこと。相方の関係性での協働であり、学校がもっとしっかりとしなければと思う。理想は学校組織へのコンサルテーションになればと思う。
- ・問題を持つ生徒に対する援助方法として、たとえば不登校を登校させる数値的な実績のみを重視するのではなく、生徒自身の本当の意味での復帰を教師とともに実践していくことが重要であると思う。
- ・子どもの困り感やその内容に寄り添い、どうしたら子どもに安心感を与えてあげられるか、また、先生方保護者にも安心感が与えられるかをテーマにしている。
- ・教師と異なる視点で子どもを見て接することが大事。聞くことに重点を置き、最初に相手が満足いくまで心の内をただ聞くこと。その後こちらから質問など語りかけるように心がけています
- ・「子どもの人権への配慮」について意識している。教師やカウンセラーが子どもを知らないうちに傷つけることもあるので・・・。

<コンサルティとの関係づくり>(7件)

- ・お互いに歩み寄りなければ成立しない。（SC が一方通行では）
- ・学校の中にうまく（自然に）溶け込んでいくことが大事だと思います。
- ・学校教育の専門性と心理や相談機関の専門性との共通点、相違点についてよく理解して子どもを見たり、対応を考えたりすることが大切だと思います。
- ・コンサルテーションをしてもその先は先生次第なので、先生の価値観、性格、熱意等を踏まえたうえで話すようにしています。
- ・SC から教師にコミュニケーション（仕事のための情報に限定せず普段から）をとることが大切なことだと思います。
- ・結局は教員との信頼関係をいかに築くかにいちばん心をくだきます。
- ・日ごろより生徒ばかりでなく先生方とのコミュニケーションもとっておく。

<コンサルティの問題解決への支援>(2件)

- ・教員が比較的すぐにできそうな方法を「やってみようかな」と軽い気持ちで取り組んでもらえるようサポートするのが大切と考えます。

- ・多角的に問題を見つめ、実際に役に立つ助言を心がけているつもりです。

<コンサルテーションに関する自己評価>(4件)

- ・私の場合私立中高一貫校での活動であるため今回のコンサルテーションとの関係についてズレがあると思いました。
- ・今回の質問項目はコンサルテーションを行ううえでどれも大切なものだと思う。「あてはまる」と回答しながらも、自分が実際にどこまでできているのかと自問自答しながらの回答となった。
- ・アンケートによって、自分の過不足が明確化した印象はあります。何が大切かと考えるということと、実際にできていることには差がある。アセスメントや生徒理解について自信もあるが、設定された教師との間では動けるが、広く気さくに動けるかという苦手な面もある。
- ・今回このアンケートによって自分のこれまでの相談員としての活動を振り返ることができ、又これから続けていく上で自分の立場・責任を再確認致しました。

<コンサルテーションの理解のなさ>(6件)

- ・SC についてコンサルタント、コンサルテーションであるという認識がまだ学校現場に浸透していないのが実情だと思う。指導ではなくコンサルテーションなのだという意識を SC 教員双方に広がってほしい。
- ・コンサルテーションの意味が教育現場であり理解されておらず、「指導してもらおう」または「指導されている」「自分が子どものことでカウンセリングを受ける」という意識の教師が多い。
- ・教師の側に“コンサルテーションとは何か”が十分周知されていないように思います。「縦」の指導というイメージを持っている方も多いと感じます。教師への研修が必要と思います。
- ・コンサルテーションに関して各教員間で認識の違いが大きく、一概にまとめて言えない部分がある。ケースによって、担任によって、関わる人間によっての差異、また学校間の差異はかなり大きい。
- ・SC の必要性は感じていますが、コンサルテーションを充実させていくための条件が、現在の学校現場並びに SC 双方において未整備だと思います。学校現場においては教師の多忙化が原因で時間の面で困難を感じます。
- ・その学校がコンサルタントを必要としているかいないかでコンサルテーションの質が大きく変わってくる。必要と感じていない、必要かどうかわからない教職員が多い場合、コンサルテーション活動についての説明からになる。

<コンサルタントの課題>(6件)

- ・SC としてコンサルテーションするには臨床家としてかなり力があると思われる。教師や親からの情報で子どもの見立てをし、教師学校の見立てをして、役に立つコンサルテーションをしていく力をどのように身につけていくかが問題。
- ・学校現場に専門家が溶け込んで、信頼関係に根ざした連携が実現していくことが理想だと思うが、異なるものを受け入れにくい部分もまだまだあり、知識以上にカウンセラーの柔軟な人間性が必須であると思う。
- ・SC の専門性や有効性を認めてもらうために、まだまだ実践が必要なのだと痛感します。同時に教育の専門家であることをもう少し引き立てていけるよう。
- ・コンサルタントの人間観、熱意、経験の程度、情報量によって対応に格差があるのではないかと。この分野に限らないが。
- ・時代とともに学問も、資源の集め方や診断方法などに進歩があります。この変化に沿う能力と意欲を欠く人は、権威だけに依拠してコンサルトすべきではないと思います。
- ・SC には一定期間の教職経験が必須の条件と思う。教師と違う視点からの見方はありえない。ともに考えていくうちに新たな発見があり、この発見は自分を一段高い位置に置いた見方である。

中心のコンサルテーションにおいて、コンサルティに介入すべき点として指摘している。つまり、コンサルテーションで扱うべき点として先行研究が指摘しているポイントについて、日本の学校現場で活動しているコンサルタントが難しさを感じていることが明らかになったといえる。

また、子どもへの支援に関しても、管理職によってコンサルタントの動きが異なってくることでコンサルタントの校内での動きが変わってくることによる困惑もあげられた。管理職のニーズに応じて対応していくことについてはすでに指摘されている点でもある。さらに子どもに関する理解と対応がコンサルタントと全く違うという難しさもあげられた。この点に関しては、コンサルテーションの概念そのものが「異なる立場」ということが前提となっている。コンサルタントは教師と異なる専門性を持つために教師と視点が違うという前提がある。そのため、こうした視点の違いをどのように共有化していくかについて、コンサルタントが適切にかかわる必要がある。こうした難しさについて、コンサルタントの力量をどのように形成していくかはコンサルタントの養成課程、および現場研修において大きな課題となっているだろう。

2. コンサルティとコンサルタントの比較

次に、小林(2008a)で明らかにされたコンサルティの評価・意見に関するカテゴリーと、本研究で見出されたカテゴリーを比較し(Fig.1)、関連あるカテゴリーについて考察した。

小林(2008a)の研究では、コンサルティの立場からのコンサルタントへの要望として、学校の特性や教師の忙しさへの理解と配慮を望んでいたことを示していた。これについてはコンサルタントの方でも教師の立場や気持ちを尊重したコミュニケーションをとろうと工夫している点があげられており、コンサルティとコンサルタントにおいて一致している点である。しかし、コンサルティの否定的評価の中には、学校の特性や忙しさを考慮しないコンサルタントに向けての不満などがあげられていた。つまり、コンサルタントが学校や教師の特性や立場を理解したコミュニケーションがとれていれば、教師は自分の立場が理解されていると感じるが、そうでない場合にコンサルタントへの否定的な評価につながると考えられる。そのため、こうしたコンサルティの立場を理解したコミュニケーションは

コンサルテーションの評価と非常に密接に関連している。

さらにコンサルティは子どもの問題を解決するための具体的ななかかわりを望んでいたが、一方でその問題解決が不十分であるとして否定的評価があげられていた。小林・庄司(2007)は、教師がコンサルテーションについて十分な認識を持っていないこと、さらに教師は子どもにどう対応すればいいのかわかり、その答えだけを求めるスタンスをとりやすい状態にあることを指摘している。つまり、コンサルタントの問題解決への関わりによって解決すれば有効感につながりやすいが、一方で解決できなければ否定的な評価にも結び付きやすいことを示している。コンサルタントからも具体的な問題解決に関する関わりが述べられているが、こうした関わりがコンサルテーションの評価にシビアにつながることをコンサルタントはより意識してコンサルテーションを行っていくことが必要であろう。学校や教師の状況は様々であり、コンサルタントに対する態度やニーズも異なってくる。こうした状況を敏感に感じ、対応しながら、コンサルタントとしてコンサルティと共に子どもの問題を解決していくことがコンサルタントには求められる。コンサルタントはこの点に難しさを感じていたのである。コンサルタントがコンサルティにどのように関わり、どのように問題解決を進めていくか、この2つがコンサルテーションをどのように進めていくかという研修を行う上で最も重要なポイントとなる。

また、コンサルタントとしての姿勢や態度に関しては、コンサルティからの要望、そしてコンサルタントからも「こうあるべき」という記述がなされていた。しかし、コンサルティからはコンサルタントによって熱意や力量が異なることが指摘されていたが(小林, 2008a)、本研究でもコンサルタント側からもこうした格差や他にも様々な課題があることが述べられた。少なくともコンサルタントの力量や熱意の格差の問題はSC・相談員に限ったことではなく、ヒューマンサービスの領域において共通の課題であるといえる。こうしたコンサルタントの課題をクリアしていくためにも、コンサルティが信頼でき、共に問題を解決できる、コンサルタントとしての最低限の専門性、コミュニケーションスキル、問題解決スキルなどがきちんと議論され、コンサルタントの基準が設定される必要があるだろう。

謝辞

本調査の実施に際して、多大なるご協力を賜りました各教育委員会、そしてお忙しい中、回答していただきました多くのスクールカウンセラー・相談員の先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Erchul, W. P. & Martins, B. K. 2002 *School consultation -conceptual and empirical bases of practice-* New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers

石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
 伊藤美奈子・中村健 1998 学校現場へのスクールカウンセラー導入についての意識調査-中学校教師とカウンセラーを対象に- 教育心理学研究, 46, 121-130.
 小林朋子・庄司一子 2007 コンサルテーションにおいてコンサルタントに求められる姿勢とスキル-コンサルティとコンサルタントそれぞれの立場からの比較検討 障害理解研究, 9, 37-48.
 小林朋子 2008a 学校コンサルテーションにおけるコンサルティ-コンサルタントの連携に関する研究(1)-コンサルタントとしてのスクールカウンセラー・相談員についての教師の評価・意見-, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 15, 117-124.
 小林朋子 2008b 子ども支援のための教師へのコンサルテーションに関する研究, 筑波大学大学院人間総

合科学研究科学位論文.
 上村恵津子・石隈利紀 2007 保護者面談における教師の連携構築プロセスに関する研究: グラウンデッド・セオリー・アプローチによる教師の発話分析を通して, 教育心理学研究, 55, 560-572.
 Medwey, F. J., & Forman, S. G. 1980 Psychologist' and Teachers' reactions to mental health and behavioral school consultation. *Journal of School Psychology*, 18, 338-348.
 日本発達心理学会 2000 心理学・倫理ガイドブック-リサーチと臨床- 有斐閣.
 田村節子・石隈利紀 2007 保護者はクライアントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか: 母親の手記の質的分析, 教育心理学研究, 55, 438-450.

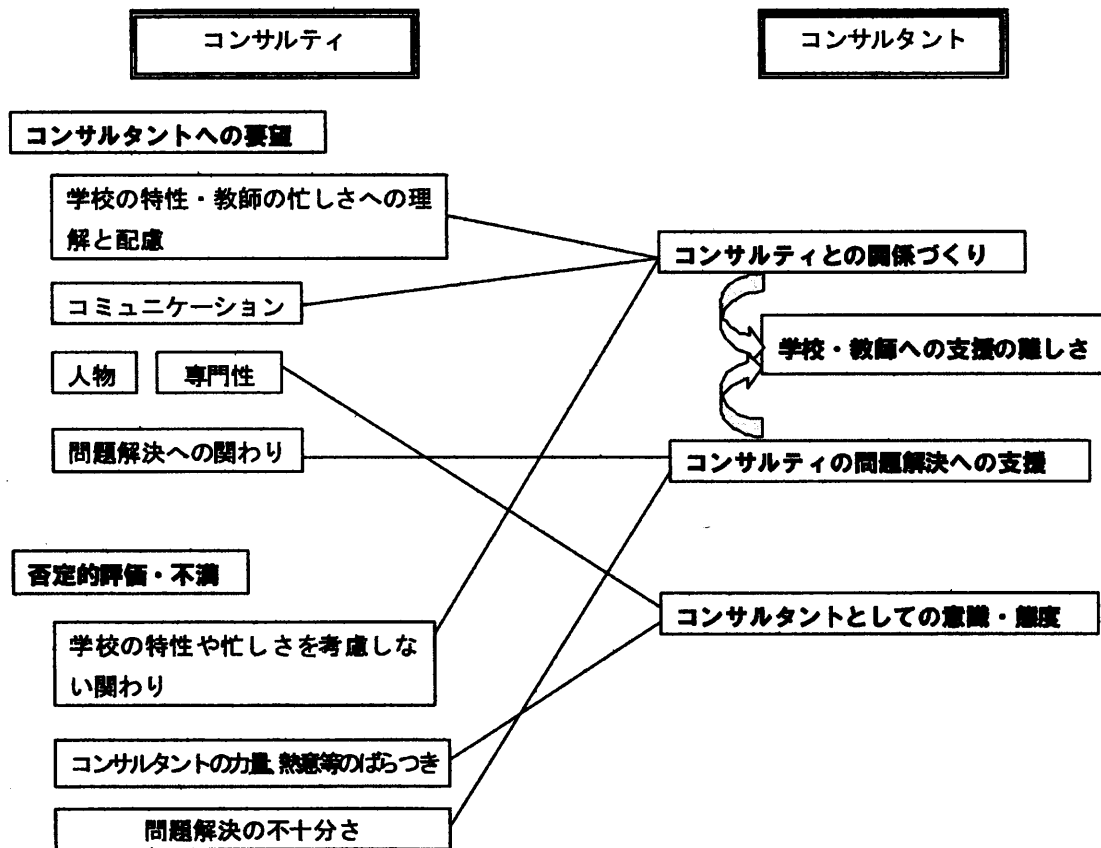


Fig.1 コンサルティおよびコンサルタントの関連するカテゴリーの比較